

板倉好重戦死地の碑

板倉好重は、深溝城主 松平好景の家臣で、善明堤の戦い（1561（永禄4）年）の時に中島城を、吉良氏から取り戻そうと出陣した。中島城を吉良氏の手から奪い返して、本拠地である東条城まで追撃したが、途中の善明堤で待ち伏せにあった。主人の松平好景は討ち死に、板倉好重も傷を負い、味方のいる中島城まで戻ろうとしたが、途中で力尽き、中島西町に建っている碑の辺りでなくなったと伝えられている。好重の火葬は高畑町の旧火葬場で行われたと言われている。

碑には次のように刻まれている。別項「善明堤の戦い」で、「善明堤の戦い」が1556年に行われたと言う説を紹介している。1561年は辛酉（かのととり、しんゆう）で、1556年は丙辰（ひのえたつ、へいしん）であるため、碑文では1561年と考えられる。

永禄四年辛酉年

板倉八右衛門源好重戦死地

四月十五日

【板倉好重（1520～1561）】

板倉氏は、足利宮内少輔泰氏の次男、義頭を祖とする。義頭ははじめ板倉二郎、のち洪川とあらため、満頼や義俊の代には九州探題職をつとめた。三河の板倉氏は、義鏡の子孫で三河に流れた板倉頼重が祖とされ、三河国額田郡小美村に住み、頼重・好重父子は深溝松平氏に仕えた。板倉好重（いたくら よしげ）は板倉頼重の長男で八右衛門という。1561年（永禄4）年に、松平好景の子、伊忠は上野城救援を命じられた。そのため、伊忠の守っていた中島城が手薄になり、それを知った吉良義昭は中島城攻めを開始した。松平好景は深溝城から中島城救援に出陣。松平好景、板倉好重は吉良勢との合戦（善明堤の戦い）で討死した。享年42歳、子供は忠重、勝重、定重の3人である。

板倉家の家系図：頼重—好重—勝重—重宗—重郷

【板倉勝重（1545～1624）】

「家康二十神将」の1人に、この中島出身で京都所司代をも務めた板倉勝重という人物がいる。京都所司代とは、元々は織田信長が京都の治安維持のために置いた機関であったが、江戸時代には京都の制庄、朝廷や公家の監察、豊臣家や西日本諸大名の監視、五畿内及び近江、丹波、播磨の8か国の民政を総括していた江戸幕府の重要な役職であった。このような武将、というより政治家（役人）がこの中島から出ていたことは驚く限りである。

勝重は1545（天文14）年、三河国額田郡小美村（現岡崎市小美町）に生まれた。幼少の11歳で出家して浄土真宗永安寺（現中島町後屋敷）の玉庵和尚の弟子となり香誉宗哲と名乗った。1561（永禄4）年に父板倉好重が深溝松平好景に仕えて善明堤の戦いで戦死し（現中島西町の戦死地碑）、さらに家督を継いだ弟定重も1574（天正2）年に遠江国高天神城の戦いで戦死したため、家康の命により33歳で還俗し家督を相続した。勝重は生来慎み深く正直で歴史に精通していたと言われている。1586（天正14）年に家康が浜松より駿府へ移った際には駿府町奉行となり、公平明哲で卓越した裁断を下し名奉行の誉を高めた。1590（天正18）年に家康が関東へ移封されると、関東地割奉行、小田原奉行、江戸町奉行を兼務し武蔵国新座郡・豊嶋郡で千石を給された。

関ヶ原の戦い後の1601（慶長6）年、豊富な経験と老練な手腕を買われ、京都町奉行から京都所司代に任命され、京都の治安維持と朝廷の掌握、さらに大坂の豊臣家の監視に当たった。勝重は京都所司代として家康の征夷大將軍就任に奔走し、1603（慶長8）年家康が江戸幕府を開いた際に従五位下に叙任され伊賀守と称した。勝重は1603年に永安寺を再興し中島山長圀寺と改称し、板倉一門代々の菩提寺に定めた。重宗が勝重の七回忌の寛永7（1630）年に、これを貝吹村（現西尾市貝吹町）の万燈山麓に移して伽藍を整備し万燈山長圀寺とした。そして、肖影堂を建て、父勝重の木像を安置した。勝重は1624（寛永元）年4月29日に死去した。享年80歳であった。



戦死の碑 20150731



戦死の碑 20070801



戦死の碑 20150731



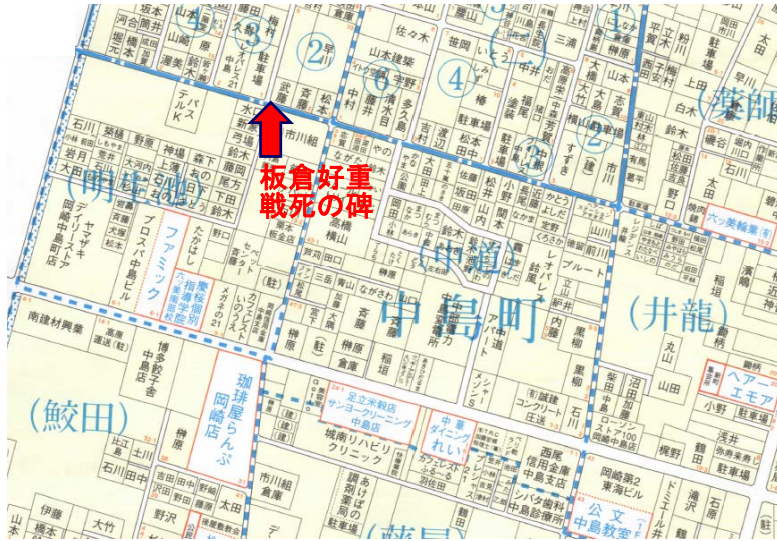
火葬場跡 20151014



永安寺跡 20150801



長圓寺 20150801



本項は以下の資料を引用している。

[六ッ美南部の歴史・文化を紐解く]

著者 岡崎市立六ッ美南部小学校 高須 亮平
発行日 2012（平成24）年3月31日 初版発行
印刷所 ブラザー印刷株式会社

[六ッ美村誌]

編者： 六ッ美村是調査会
発行： 六ッ美村是調査会
発行日：1926（大正15）年12月1日
発行所：日新堂書店
印刷所：活版印刷所

[六ッ美風土記]

編者： 岡崎市立六ッ美中部小学校父母教師会
監修： 太田 満也
発行： 岡崎市立六ッ美中部小学校父母教師会
発行日：1975（昭和50）年3月24日
印刷所：あいち印刷株式会社